

板野中学校 同和教育だより

MY SKY No. 5

マイ・スカイ

2000年6月6日(毎月第1・第3火曜日きまぐれ)発行

発行者

編集・文責

副吉成正士

副次本知己

先日サッカーの練習試合に行っていたときのことでした。対戦相手のサッカー部の顧問の先生は同和教育のつながりで出会った先生で、板野中学校にも何度か同和教育の勉強に来たことがある、私たちの心強い仲間でした。その先生から、ジーンとくる話を伺ったのですが、みなさんに紹介したいと思います。

試合中、私が審判をしていて、ふと気づいて気になっていたことがありました。それは、そのチームのユニフォームの袖にひらめく、黒い小さなおびでした。

「ユニフォームのデザインかな〜？」

私はずっとそう思っていたのですが、あまりにも気になったので、試合の合間をみて一人の選手に尋ねてみました。

「その黒いのは、ユニフォームのデザイン？」

「いえ、これは亡くなった先輩の……」

試合の途中だったので、言葉はそこで途切れました。

その試合が終わった後、顧問の先生に再度尋ねてみました。

「あの黒いおびのことをさっき選手に聞いてみたんですけど、何かあったんですか？」
するとこう答えてくれました。

「実は選手が急に亡くなってね……。ちょうど1年くらい前の6月でしたけど、もう本当につらかったですよ。病気だったんですけどね、3年生の最後の総体前で……。夜中だったんですけど、選手全員病院にやって来ましたよ……。悲しさをバネにしてやってきましたけど、1年経ってようやくチーム全員で峠を越えたって感じです。この話をすると、今でも思い出して涙が出て来るんですけどね……。」

こう言いながら、その先生は悲し涙、悔し涙を笑顔でごまかしていました。このチームが何かまとまっているように見えたのは、こんなことがあったからかもしれません。今、亡くなった選手の弟が、3年生として最後の総体に挑もうとしているそうです。

みなさんも部活動に、またいろんなことに頑張っていることと思います。でも、自分の命

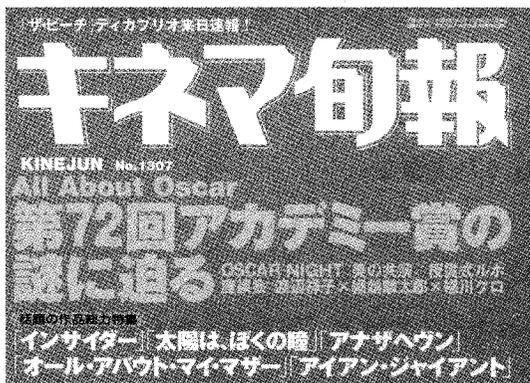
が「あと一ヶ月」と言われたらどうでしょうか？どんな行動に出るでしょうか？

長かろうが短かろうが、人の命には限りがあります。それは運命とも言えますが、その運命の中で、みなさんはどんな生き方をしますか？「死んだ人のために……」とは思いませんが、私は、やはり「今」を全力で生き抜きたいと思うんです。後悔しない「今」を過ごしたいと思うんです。限りある命をキラキラと輝かせて歩みたいと思うんです。そのためには、言いたいことやしたいことを我慢がまんするのではなく、素直に言ったり行動しようと思っています。ときには人とぶつかることもあります。でも、そのことから逃げることなく、正面から向き合い、解わかり合う努力を続けようと思います。

同和教育は、人とつながり合う喜びを教えてくださいました。その営いとなみを、日々続けていきたいと思っています。



◇^{ざっし}雑誌「^{じゅんぽう}キネマ旬報」^のに載りました。^{こころ}ドキュメントビデオ「わたしたちの試み」◇



徳島県では、毎年部落問題への啓発を行うための映画やビデオを制作さくせいしています。昨年制作されたのが、この「わたしたちの試み」です。このビデオが、あの有名な雑誌「キネマ旬報」に掲載けいさいされました。知らない人もいますが、これは実はすごいことなんですよ。その雑誌の表紙が左です。

そして、下に載せたのが、そのビデオの紹介用パンフレットです。昨年の夏休みに一般公募で集められた徳島県下の高校生たちの、シナリオなしのドキュメントビデオです。とり



あえず、紹介用パンフレットを見てみてください。次のページには、「キネマ旬報」に載せられた記事を紹介したいと思います。

同和問題啓発ドキュメントビデオ

わたしたち の試み

161999年、
16人の高校生の…夏



上映時間／第一部(53分14秒)・第二部(54分58秒)

VTR価格／第一部・第二部とも各90,000円(税別) 第一部・第二部セット販売135,000円(税別)

企画／徳島県・(財)徳島県同和对策推進会
制作／東映株式会社



東映株式会社 教育映像部

〒104-0031 東京都中央区京橋2-17-1 電話 03-3525-2631 FAX 03-3525-3632

高校生が 本音 でトーク!

差別問題は本音で語らないと解決につながらない…とされていますが、実際はどうでしょうか？
 一般公募で集まった16人の高校生が、差別問題について本音をぶつけ合い激論をするなか、対立や分裂を
 経ながら語り合った8日間のドキュメントです。
 高校生たちが自分を見つめた8日間の変容から、私たちは何を感じとれるでしょうか。

「部落差別…遭ったこともないから、ピンとこない」



「本音の部分は立ち入り禁止区域…心の扉を開けなければ」

「答えのないことについて考えることに意味がある」



「努力してもどうにもならないことを突いてくるのは卑怯だ」

「次々と変わっていく自分があって…今の自分が好きだ」

「公式だけがひとり歩き」



自分があって…今の自分が好きだ」



映画 出演者大募集
 高校生集まれ! ターゲットは「差別」
 公式だけがひとり歩き

スタッフ●プロデューサー／藤井秀雄、中鉢裕幸 監督・構成／前田和男 撮影／岩淵弘、玉手久也 照明／田久保剛

- | | | | | |
|--------|--------------------------|-----------|---------------|-----------------|
| 関東営業所 | 東京都中央区京橋2-12-1 | 〒104-0091 | ☎03-3535-3631 | FAX03-3535-3632 |
| 関西営業所 | 大阪市北区豊根崎新地1-13-22 | 〒530-0002 | ☎06-6345-9026 | FAX06-6345-6756 |
| 広島出張所 | 広島市中区国泰寺町1-5-31 | 〒730-0042 | ☎082-249-3930 | FAX082-249-2936 |
| 高松出張所 | 高松市本町11-7 | 〒760-0032 | ☎087-851-3766 | FAX087-851-3688 |
| 中部営業所 | 名古屋市中区錦3-24-3 | 〒460-0003 | ☎052-971-0923 | FAX052-961-1847 |
| 九州営業所 | 福岡市博多区中洲4-18-18 福岡東映プラザ内 | 〒810-0801 | ☎092-262-3101 | FAX092-272-0191 |
| 北海道営業所 | 札幌市中央区南一条西7-4 | 〒060-0061 | ☎011-231-1439 | FAX011-241-6487 |

●お買い上げは…



「わたしたちの試み」

わたしたちの試み
1999年 高校生の
夏

東映作品
「スタッフ」プロデューサー
藤井秀雄、中鉢裕幸
演出・構成／前田和男 撮
影／岩淵弘、玉手久也 照

明／田久保剛 企画／徳島
県 財徳島県同和对策推進
会 出演／一般公募により
集まった高校生約200人
完成／00年 第1部53分、
第2部54分(ビデオ作品)

【内容】この映画は部落差別問題について高校生たちのフリー・ディスカッションの模様を記録した作品である。差別問題を考える同和教育のあり方には劇映画、記録映画、社会教育の教材スタイルなど今まで様々な形のアプローチが行われてきた。だが、それらの方法は悪くはないのだが、どうも差別問題に対して、まひとつ、スッキリとテーマを伝えることができず、納得できる作品が少なかったことも確かである。

差別問題はもとも人間の問題であるからそれらに関して資料や教材を利用してもよいが、もっと直接的な方法でその問題に取り組む方法もあつてよいのではないか。そこで、この映画は一般公募から集まった徳島県下の16人の高校生男女(男7人、女9人)たちが差別

別問題に就いて8日間、まったく思うままに自由に話し合うディスカッションを行い、その模様を前後約2時間に収めることになった。冒頭、一人一人の自己紹介から始まるこの内容は、当初、この問題に初めから関心のある人もいれば、あまり関心を持っていない人もいて、それぞれ様々である。問題に向ける関心の度合いがかなり異なっている。

差別という固定した観念にどう向き合うか。ディスカッションの初めは参加者自身の個性や癖などに話題が集中する。そして女子と男子の性別、自分と違うものを見た時にそれを受け入れられないということから差別や偏見が生まれるという感想。障害者に向ける健全者からの意見。

彼等は街頭で大人たちにもインタビュを試みる。大人たちは部落差別に関して結婚の時などは障害にならぬという意見もあつた。おむね大人たちは差別に対して否定的、懐疑的である。当然、高校生たちは大人の

意見に納得できない。そこで一人が「差別はいけない」という公式が独り歩きしているのではないかと問う。このような考えは話し合いの中からでしか生まれてこないものだ。

この映画の魅力は差別というテーマを前に高校生たちが、世慣れた大人の持つ打算的な思考とは別に自分が差別される側であつたらどうか、あるいは差別の本質というものが形を変えて自分たちの気持ちの中に存在するのではないだろうかといった身近な視点でストレートに語り合っている点である。そして現実と同和地区に起こる差別問題を彼等が差別する者と差別される側の立場に立ち、芝居をするることによって問題の深さをより良く知ろうとする。

インタビュや芝居も含めて進められていく高校生たちのディスカッションはあるところまで進んだ時点で「答えのないことについて考えることに意味がある」というユニークな見解を生み出す。

差別の問題は歴史的にも長く続いた問題である。8日間のディスカッションで結論が出せる性質のものではない。それにもかかわらず止まるところを知らぬといったような彼等の熱い話し合いから引き出されたものは、このような議論をする、この自体に意味があるのではないかという現状の認識なのである。外国ではデイベート(議論)の歴史がある。日本の高校生たちが初歩の話し合いから進んでこのような議論をする自分たちの立場の重みを認識しただけでも意義があるといふべきだろう。

この作品は差別問題を語り合うという形式の中に、その問題点を充分に入れながら、今まで日本人が不得手としてきた議論の重要さと必要性を過不足なく入れて見応えのある作品になっている。社会教育用として薦められる一作である。(問い合わせ先)東映教育映像部(株) TEL03・3535・3631、FAX03・3535・3632。

その問題点を充分に入れながら、今まで日本人が不得手としてきた議論の重要さと必要性を過不足なく入れて見応えのある作品になっている。社会教育用として薦められる一作である。(問い合わせ先)東映教育映像部(株) TEL03・3535・3631、FAX03・3535・3632。

私もこのビデオ(2本組)を見ましたが、何か熱うあつ〜くなってしまいました。何しろぶっつけ本番の本音勝負ほんねしやうぶですから、見応えみこたありましたよ。特に差別する側がわとされる側がわに分かれての芝居しばいは、芝居の域いきこを超えていたように思います。恐ろしいくらいでした。けど、それが差別の現実とも言えます。実際、この芝居のような場面はうちの家の中でもありました。

部落差別は、結構資料や本の中の出来事ではないんですよね。知らなかっただけで、自分の一番身近なところに眠ねむっていたりするものなんだと思います。みなさんの家庭ではどうでしょうか？

差別問題の芽めは、生きている限りいつか必ず起きあがってくるものだと思います。それを叩たたき起こしたりするんじゃないくて、少しずつ、優しく、時間をかけてゆっくり起こしていくことが、物事ものごとを正しく考えられるようになる秘訣ひけつのように思います。「大人だけの問題」「大人になってからの問題」じゃなく、小さい頃ころから今も、そして死ぬまで考えていく問題だと思います。

みなさん！機会をつくってぜひこのビデオを見てみてみてください。学校にありますので、借りようという方は、吉成まで！



校内部落問題意見発表会が

12日に行われます。それに向けた取り組みが、各学級で行われている最中さいちゆうだと思います。この機会に、是非学級の、学年の仲間の思っていること、思ってきたことを知り、つながり合ってみてください。つながる手段しゅだんはたくさんありますが、その中でも「発表」は、大切な行動です。唯一ゆいいつ一人間だけが、言葉を使うと言われています。その能力をしっかりと高める機会だと思ってみてください。がんばれ！みんな！



◇ 今後の日程 ◇ ◇ ★☆☆ ★★★ ☆☆☆☆ ★★★★★ ☆☆☆

- 6月8日(木) 学習会南小校区保護者会(19:30～；南公会堂)→みんな来てや～！
- 12日(月) 校内部落問題意見発表会(1・2校時：1年、3・4校時：2年、5・6校時：3年；体育館)→みんなガンバロー！！
- 〃 学習会東小校区保護者会(19:30～；東公会堂)→みんな来てや～！
- 14日(水) 校内同和かるた取り大会男子の部(放課後；大会議室)→みんながんばれ！
- 15日(木) 校内同和かるた取り大会女子の部(放課後；大会議室)→めざせ！県大会！
- 16日(金) 南小東小・学習会合同解放子ども会(16:30～；南公会堂)→中学生もお兄さん・お姉さんとして行く？